



「胃と腸」 2021 年増刊号 消化管診断・治療手技のすべて 2021

日本大学教授・消化器肝臓内科学

後藤田 卓志

次はあなたの「なぜ？」と工夫が主流となる！

消化管の診断から治療を取り扱った書籍はこれまでも多数出版されているが、本書はそれぞれの臓器で解剖の解説から始まっているところが非常に斬新である。この大原則を押さえ、最新の内視鏡診断と治療につながる要諦が盛り込まれており初学者から上級医まで幅広い層に役立つ項目立てとなっている。消化管疾患はスクリーニングや無症状あるいは鑑別疾患除外目的に行った内視鏡検査で発見されることが多い。そして何らかの疾患に遭遇した場合、その疾患を報告書に的確にドキュメントしなくてはならない。また、意味のある・なしにかかわらず背景周辺粘膜の所見の把握は正確な診断や的確な治療につながる場合がある。

2000年代に入って内視鏡治療の進歩は目覚ましい。これは、早期病変での拾い上げが進んだことと同時に治療法の確立が寄与している。特に早期消化管癌の治療が外科医だけでなく内科医にも可能となった時代である。そして現在、多くの工夫や新規治療の登場によって知識として追いつくのも大変な時代である。本書は、解剖という一丁目一番地を押さえた上で診断のイロハが示され、治療法選択の助けとなるべく多種多様な内視鏡による治療法が網羅されており、臨床医にとって大いに役立つ。

消化器系の発生は原腸形成後につくられる単純な1本の管から始まる。このたった1本の管が咽頭から肛門管に至る消化管と肝臓や膵臓を形成する。1本の管でありながら多くの器官が原始腸管の決まった領域に形成され、各器官の位置や境界が厳密に決まっているのは生命の進化の神秘である。一方で、消化管の最も重要な生理機能は、食餌を消化吸収し生命維持に必要な成分に変換することであることを知っておく必要がある。最適な消化管の状態をつくり出すために神経細胞や内分泌細胞が介在し、神経やホルモンの指示を受けて消化液を分泌する外分泌細胞が存在する、意外と複雑な臓器である。また、消化管には病原微生物に対する体内最大の免疫担当細胞が存在している。さらに、腸内細菌叢はエネルギー産生、蠕動運動・消化吸収の促進、物質代謝の調節、感染防御、免疫能活性化など多くの作用を有している。

つまり、消化管は生命維持の基本となる臓器であり、単純な原始的臓器であるがされど消化管である。本書を片手に、臨床における「なぜ？」に思いをはせていただければ、さらなる発見や飛躍があるはずである。治療においても、提示されている手技で満足することなく次の工夫につなげていただきたい。それが医学(Science)の進歩であり医療(Art)につながる。本書は極めて時宜にかなった内容であり、内視鏡検査・診断に従事するすべての先生に必携の書物である。

●医学書院刊 B5 頁274 2021年
定価:7,920円(税込)